

ESSAY いたずら

倉元信行

17

えにし

『毎年、年賀状ありがとう、あなたの担任をさせていただいた時は24才だった私も65才となりました、元気になっています』

という書き出しで始まる長文のお手紙は、私が小学校1年と2年の時担任して頂いた女の先生からのものである。

3年ほど前に戴いたY先生からのこの手紙には、こんな不思議な縁があるものと驚かされるようなことが書かれていた。

それは、絵というものを通してつながった糸であった。

私たち家族が火事で焼け出された時、農業をやっている叔父のところにお世話になったことを前に書いた。

もう10年以上前のことになるが、この叔父から横浜の私の所へ突然電話があり、「展覧会で賞を貰ったから東京の美術館に絵を見に行ってくれ」と言うのである。

びっくりした。あの叔父が絵を描いているなんて、そして賞を貰ったなんて。

聞けば、60才になるころから油絵を始めたのだそうである。

東京都美術館に飾られた“紅葉の奥入瀬”を描いた100号の大作に私は息を呑んだ。しばし呆然と見とれるほどすばらしい絵であった。

彩られた木々とせせらぎが実に生き生きと描かれている。

“海外留学賞”という札が下がっていたが、ひいき目なしに他の受賞作を上回っていると思った。

「賞金100万円はもうたばって、バリ留学は年やから止めた」と言った叔父はその後も何度か賞を貰い、地方では結構名が売れているらしい。

恩師のY先生も在職中に絵を始められ、東京での美術展に20年以上連続入選されていたとのことである。

叔父は地方の美術協会の理事をしていてY先生とは時々顔を合わせていた。

ある時Y先生は、前から気になっていたことを叔父に尋ねた。

『実は、私はあなたと同じ名字の子を40年ほど前に担任したことがあるのですが』

私のことを説明すると、

『そりゃ、わたしの甥っ子ですばい、あれの入学式に行ったら、細い声で返事をするもんですけん、3回も名前を呼ばれましたもん』

叔父が応えたと書かれている。

私もすっかり忘れていたのだが、商売で手の離せない両親に代わって、叔父は私の小学校の入学式に行っていたのだ。だからこの叔父は、教室でこのY先生が新生生の私の名前を3度も呼ぶのを聞いていた事になる。

こういっきっかけから、叔父は、私の仕事のことや、趣味で焼き物をやっている事などを話し、私が叔父にあげていた“志野”の夫婦茶碗を

先生にプレゼントしたのである。

手紙には、

『見ごとな湯のみ一對を、今日頂きました。しっかり使い込んで下さいという注文の言葉と共に』

『人の“えにし”にはからずも感じ入り、涙しました』

『今、この文の前にあなたの作品が並んでいます』

『四十数年ぶりにあなたと逢っています』

と綴られていた。

さらにこの手紙には、次のような懐かしい思い出が収められていた。

『年賀状を頂いて、いつも思い出すのは、書道で入選したあなたを、福岡市の大名小学校の、席上揮毫会に連れていったことです。なぜなら、二人で並んで写っているその時の写真が、私のアルバムの中にしっかりと存在しているからです』

この写真は火事で焼失したので、もう私の手元の方には無いのだが、この日のことはよく覚えている。

私は一番後ろの席だった。一生懸命書こうとしても、この日はうまく書けなかった。教室を出て先生に、今日はうまく書けませんでしたと、小さな声で報告した。

先生はにっこりとうなずかれた。

あの日から四十数年も経ったことになるのだが、私には、どうしてもあの時の若々しくて優しい先生の姿が思い浮かばない。

先生にとっても、私はあの写真の中と同じ、“恥ずかしがりやの痩せっぽち”のままなのかもしれない。

小学校の6年間で2年づつ、私は3人の先生に受け持って頂いた。火事で町を離れて以来、お会いしたことはないが、これらの先生方とはずっと年賀状を交している。

みなお元気そうである。

